

お告げ～otsugen～

人物

日隈聖(22) 八橋大学院生。笹岡研究室所属。

佐伯雅史(26) 日隈の友人。社会人。

真野春馬(23) 日隈の後輩。八橋大学院生。笹岡研究室所属。

店員 A (20) 松田屋 駒沢公園駅前店の店員。

○佐伯家・リビング（朝）

薄暗い部屋に、カーテンの隙間から一筋の光が入り込んでいる。

6 畳ほどの狭い部屋は空き缶や服、書籍など、たくさんのもに囲まれており、綺麗に片付いていない。むしろ、煩雑に置かれている。

ベッドの上にはよれたスーツ姿の佐伯雅史(26)が寝ており、冷たそうなフロアリングにはジーンズを履いた日隈聖(25)が、雑魚寝をしている。

ベッド脇に置かれている佐伯の携帯が6:00を示すとともにアラームを鳴り響かせる。

日隈「うーん…」

フロアリングで寝ている日隈は不服そうに顔をしながら、目をシャバシャバと瞬きする。

一方、佐伯はアラーム音に気づく様子はなく、熟睡している。

日隈、アラーム音の鳴る先が佐伯の横に置かれている携帯とわかるや否や、フローリングに落ちている空き缶を持ち、ベッドに居る佐伯に投げつける。投げた空き缶が佐伯に命中する。佐伯に起床する様子は見られない。未だ、アラーム音は鳴り続ける。

日隈「……………うるさいな」

○松田屋 駒沢公園駅前店（朝）

早朝にも関わらず店内は混み合った様子。日隈と佐伯は対面になり、テーブル席に座っている。

日隈はフローリングで寝ていた時と同じ服装であるが、佐伯はアイロンのかったシャツに皺のないスーツを着ている。

日隈は何食わぬ顔で携帯を触りながら牛丼を待つ。一方、佐伯は頬を小刻みに叩きながら、携帯を真剣な眼差しで

見ている。

日隈、佐伯を見ては少しにやけて、佐伯の様子を隠し撮りしようとする。

シャッター音「カシャ」

シャッター音が鳴ると同時に、キッチンから牛井をトレーに乗せた店員△

(20) が歩いてくる。

店員△「お待たせしました、牛井並みと高菜

明太マヨ牛井並みです」

佐伯「僕普通の並みです」

佐伯は箸置きから素早く箸を持ち出し自身が頼んだ牛井の並みを店員から手渡しで受け取る。

佐伯「いただきます」

小声で発するや否や、勢いよく牛井をかき込む佐伯。

一方、日隈はゆっくりと店員から高菜明太マヨ牛井を受け取り、写真に収めようとする。

日隈「起床後すぐのこれは罪悪感だね」

ニヤニヤしながら写真を撮る日隈。

牛丼を掻き込みながら日隈の様子をチラチラ見る佐伯。

佐伯「ふと、疑問に思ってたんだけどさ」

咀嚼しながら喋り出す佐伯。

日隈「うん、飲み込んでからいいな」

佐伯はコップの水を含みながら、口内の食べ物を急いで消化しようとする。

佐伯「お待たせ。でさ、今、佐伯写真撮ったじゃん。それいつ消すの？単純な疑問」

佐伯は質問を終えると再び牛丼を掻き込み始める。

日隈「……不定期かな？スマホの容量少なくなっただと思っただら、消すよ。でも、いい

店の写真は残しとくけどね、記録として」
佐伯は再び水を含み、咀嚼する。

佐伯「なるほどね、見返したりすんの？」

日隈「……見返したりは……」

佐伯「しないっばいね。そう、その行動、俺あんまり共感できないんだよね」

苦笑しながら応える佐伯。

日隈「ん？それは、写真を撮ることが、それとも見返さないことが？」

佐伯「んー、……どっちも」

佐伯はどんぶり皿についているご飯粒をかき集め、腕時計をチラチラ見る。

日隈「まー佐伯はそうか。必要なさそう」

佐伯「それ、どういう意味よ」

日隈「いや、深い意味はない。佐伯はそのままで」

日隈は苦笑しながら、机に置かれたスマホに視線を落とす。

○八橋大学・笹岡研究室（朝）

キッチンの上に置かれた湯沸かし器が稼働している様子。

研究室内のデスクには沢山の書物が山積みになっている。

キッチン前には、ホワイトボードがあり、『学会まで後21日』と書かれて

いる。

リクライニングチェアに深く腰をか
けている日隈。椅子を前後に揺らしな
がら、スマホを触っている。なお、日
隈の机も書籍が山積みである。

軽やかな扉が開く音がする。

日隈の隣のデスクに、荷物を置く真野

春馬(23)。

真野「おはようございます」

日隈「おはよー、今日早いな」

真野「はい、笹岡先生から早く初稿あげると

言われてるんで」

日隈「あーそりや大変だ」

真野「です、です。大変です」

湯沸かし器のボタンがカッチと鳴る。

日隈「おっ、やっただ」

椅子から立ち上がる日隈。

ホワイトボード裏にあるキッチンに向
かって、歩き出す日隈。

真野「俺ももらっていいですか？」

日隈「いいよ」

ホワイトボード裏にあるキッチンを覗き込む日隈。

日隈「そんな手間じゃないからね……」

腕を目一杯伸ばしながら、湯沸かし器とシンク脇に置かれたカップを覗き手に取ろうとする。

日隈「そういえば、朝ごはん食った？ちなみに俺は……」

真野「牛丼、ストーリー見ましたよ」

日隈「載せてたね。そういえば」

ホワイトボード裏から出てきた日隈の両手には、湯沸かし器と別のカップ。

真野「たった1、2時間前の自分の言動もう忘れてたんですか？」

真野は自身の目の前にあるPCを触りながら辛辣な口調で言う。

日隈「ひどいこと言うね、俺も日々の研究に忙殺されているんだよ」

日隈、コーヒーバッグをセットする。

真野「……前から思ってたんですけど、忘れるなら撮る意味くないですか？」

日隈はカップにお湯を注ぎながら、

日隈「お前、……それ今日〰度目だよ」

真野「〰度目？何がですか？」

日隈「母数がそもそも少ない俺の周りでその質問する人がこんなにもいるかね」

日隈カップから目を外し、真野の顔を見つめる。

日隈「あー、そういうこと。後で詳しく聞くんで、ちゃんと下見てください」

真野「わかったよ、ったく」

○八橋大学・笹岡研究室（夜）

窓から見える外の景色は真っ暗。

日隈、死んだ目でPCを目の前にタイピングをしている。

日隈の死んだ目から見える視界の前に真野の生気のある目が横入りする。

真野「お疲れ様です。僕もう帰りますね」

日隈は机の上にあるスマホのホームボタンを押し、22:05と書かれた画面を確認する。

日隈「いいな、終わったんだ。お疲れ」

日隈は引き続き作業に集中する。

真野「はい。なんで、日隈さんの代わりにうまいもん食ってきます。写真は撮らないですけど」

真野ははつらつとした表情をしながらスキップをし、研究室から出ていく。

重い扉が閉まる音。

その音を聞くな否や、日隈は深く息を吐き、扉の方向を向く。

笹岡研究室には日隈一人だけの様子。

日隈「……ダメだ、やる気なくなった」

数秒間硬直する日隈。その後、携帯を触り出し、マップ上で『一人飲み』と検索をかける。

大学周辺で検索内容に該当する店は

件しか表示されず。

日隈「一件外れの、一件昨日行ったの」
数秒間、窓の外を眺める日隈。

日隈「そういえば……」

日隈は写真アプリをタップし、今朝撮った牛井の写真を眺める。

日隈「見返した結果……」

目の前にあるPCを見つめる。

日隈「我が人生に起伏なし」

再び視線をスマホに向ける。

日隈「見返した結果……」

スマホ画面を横にスクロールする。

日隈「我が人生に起伏……、これ」

スマホ画面には、黒色の背景に白字で「木とか虫とかこんな色が出るなんて不思議ですね」と書かれたスクリーンショット。

日隈M「訳が分からず、我が人生に少しばかり起伏が生じてしまった」

(了)

